

アートプロジェクト

未定

本プロジェクトは、観客の動きやジェスチャーによって音と光が作動する、センサー連動型インスタレーションである。千葉市の未活用空間を活用し、あらゆる年齢層の市民が参加できる体験を提供する。地元から不要な電子機器（テレビ、ラジオ、レコードプレーヤー等）を寄付として受け取り、それらをアートの構成要素として再活用する。観客は会場中央の台座で「指揮者」として作品を動かし、没入的な体験を得る。この作品は、廃棄や使い捨てが前提となる現代社会の消費文化に疑問を投げかけ、製品が再び命を吹き込まれるプロセスを示す。資源と労働力の浪費に対する意識を喚起し、物の価値と循環について考える契機となる。基本的には作家一人で実施可能だが、必要に応じて現地協力者や運搬補助が加わることも想定している。



©Simon Whetham

市民参加のかたち：材料提供・展示鑑賞

Simon Whetham（イギリス）

サイモン・ウェットサム

2005年から、パフォーマンス、作曲、インスタレーション作品のために音を創造的に使ってきた。

音を場所を探索する方法として使い、特徴的な音や隠れた音、そしてそこにかかる忍耐を体験する。このプロセスは、場所の多くの側面、物理的、社会的、心理的な側面を私に教えてくれる。このことがきっかけで、現在、消費主義や使い捨て性に起因する素材のさまざまな特性や品質を探索している。

音の潜在的なエネルギーを活用し、物体を動かすきっかけを作ったり、さまざまな素材を通じて音を鳴らし、音を変化させたりしている。予測できない、通常はアナログのシステム（例えば、天候や故障したデバイスなど）を使用し、プロセスを完全にコントロールしないようにして、協働的に進めている。近年、廃れた技術に焦点を当て、それらがどのように再利用・再活性化できるかだけでなく、なぜ廃れてしまったのか、その生産に必要な資源、そしてその後のリサイクルに関する希望や文化的な意義についても探索している。

実践の重要な側面は、レジデンシーへの参加、ワークショップの実施、パフォーマンスや公演を行うことである。特に、芸術に触れる機会が少ないグループや排除されていると感じている人々に向けて行うことに楽しみを感じ、その過程で行われる文化交流から学び、成長していることを実感している。